

日記

芥藤裕子





日記

齊藤裕子


あを創刊十周年記念句集

限定一部



1
1991 ~ 1999





胎動ありて蛹化始める秋の蝶

羽化したる秋蝶
休らふ下枝かな


羽化するも容易くはなし
秋の蝶



門の外に手を合はせをり母の友


足だけを夫に添はせる夜寒かな






夏の朝不揃ひに切る豆腐かな

静かなる植田の底に足の跡



新
緑
の
空
奪
い
つ
つ
再
開
発

父
思
ふ
匙
で
掬
ひ
し
冷
や
つ
こ




母の
声電
話で
すま
す盆
帰
り

植
ゑか
への
鉢の
下
には
蟻の
道

鯖雲を掴まへさうなビル工事

ベランダのサンダル返す酷暑かな





鈴
虫
や
枕
の
距
離
よ
り
遠
き
人

稲
妻
に
崩
れ
し
山
肌
ま
た
光
る

梨をむく目だけで物を言ふ子供

諍ひのあとの枕やちちろ虫



故郷に鶴飛来の報せ友の声

おはやうとだけ小さく言ひ柿をむく



金
木
犀
挙
動
不
審
の
人
と
な
り

26

山
茶
花
追
ひ
隣
の
家
ま
で
掃
き
に
け
り

27



山茶花の散りて黄の蕊とどめをり

山茶花のはらりはらはら箒目に





てつぺんの熟柿夕陽を透かしをり

枯芒体揺らして歩く母



初冬の空から見たり
四万十川

公園の空広がりにて
初冬かな

見送りの母にもらひし
波稜草

腿出してマフラー厚し
女学生



帳尻を合わすよに降る暮の雪

有能な主婦になりけり年の暮






我が味になりし喰積義母と喰ふ

スーパーの陳列棚も暮の顔



冬
桜
言
葉
選
み
た
る
文
送
る

外
出
を
匂
は
せ
て
ゐ
る
鯰
大
根



開
発
に
取
り
残
さ
れ
て
ビ
ル
風

手
を
合
は
す
刻
長
く
な
り
寒
椿

身籠りし夢の感觸竜の玉

優しくも冷たくもあり水仙花





福は内老母の前に撒きにけり

赤子産む夢覚めし朝梅一輪

鍵渡し北京へ発つ子春を待つ


荷造りを終へてさびしきさくら草





息大きく吸ひ込みし道沈丁花

O
L
の
弁
当
開
く
梅
の
下



汁
三
た
び
温
め
を
れ
ば
春
の
雷

荷
造
の
鍋
釜
ア
イ
ロ
ン
春
の
風

天職を目指す男の子や蜷の道

石仏の皆まるくなり花まつり



ちりてみな星になりけりさくら草

大空へ八重桜散る御苑ゆく





在りし日の板添へし父古巢あり

小さき部屋広くなりけり春の風

ダンボールみな送り出し春の風

ひと鉢の水遣り楽しカーネーション



夏
来
た
る
俄
庭
師
の
パ
チ
パ
チ
と

62

詐
欺
電
話
一
件
落
着
麦
茶
飲
む

63



指跡の畝残る中穀象虫


立ち話つい長くなり柿若葉



一行のメールの嬉し暮の春

夏風邪や久びさに聞く子の電話





蜜蜂にくすぐられをり金魚草

電車の子昼寝してゐる膝枕

三
又
路
の
い
つ
も
の
巡
査
更
衣

近
づ
き
し
名
ま
た
遠
の
き
て
走
り
梅
雨



纏
はりし
シャツ
軽
くなり
夏木
立

爪
の色
落
して
を
りぬ
夜
の
秋



じふはちの男の子が供なふ百合の花

白髪を誉める人あり盆帰り



夏空につきささりをり高層ビル

添寝する団扇のはたと止みにけり



去ぬるまでをんなはをんな唐辛子

夫の背を搔いてゐる宵鉦叩



いそがしく大根まく母を喜べり

与へられしいのちと思ふ夜長かな



まろまりしははの手をひく金木犀

大丈夫と笑うてをりぬ曼珠沙華



濁り酒笑うて言ひし本音かな

長居して友に送られ今日の月





2
2006 ~ 2007

風邪で寝るにきびのおでこそつと触れ



宇宙より万里の長城見たし秋

秋晴や天安門のひとりっ子

帰国の子待ちてきのふよりおでん



発つ人に言い尽くせなくて柿をむく

まろまりて母の捨へる木の葉かな



紅
買
ふ
て
十
一
月
の
旅
仕
度

い
た
は
り
の
声
の
沁
入
る
初
時
雨



泥付の荷物着きたる初時雨

ていねいに生きてゆきたし去年今年



風花やしよし少女の髪の毛のうへ

笑ひ声ひとり加はり年の暮



冬籠父の日記に我が名あり

初電話今汝のことをと母の言ふ



植ゑかへの如雨露の水に春の風

漣を流してゆきし春の風



冬の日を通せんぼする巨大ビル

寒稽古飛行機雲のひとつきり



発つ人の温もり残る冬の部屋

野焼の香父の野良着に残りをり



無言てふ返事してをり四月馬鹿

上向いてみな笑ひをり犬ふぐり



赤白黄混ざり具合のよきパンヂー

吊鐘の枝垂桜に隠れをり



真新しきブラウスの白春の風

漣を流してをりし春の風



植ゑかへの如雨露の水に春の風

桜愛でつ義母との時を重ねけり



さみだれ塚に降りそそぎけり椎の花

馴初めは無口さうなりチューリップ



語
ら
い
ひ
の
沈
黙
の
間
や
桜
餅

無
言
と
い
ふ
返
事
し
た
ま
ま
落
椿



ため息のつづけて二つ春の宵

捨て台詞かみしめてをり母子草



鯉のぼり富士より高くおよぎをり

蛞蝓とてひとつの命花を食む



梅雨入やこめかみで脈数へをり

振向かず角まがりけり柿若葉



真
う
え
な
り
ビ
ル
の
谷
間
の
五
月
晴

立
札
の
字
に
怒
り
あ
り
梅
雨
曇



古井戸の木蓋に降りし松落葉

自販機の銀座になくて夏帽子



送り来し母を見送る雲の峰

桐の花飛降りてくる散歩道



葱坊主活けられてをりガラス壺

母の手に似たる人あり梅雨の寺



父に供ふ母の育てし百合の花

太古より同じ雨音梅雨の夜



梅雨の夜母へ電話のつながらず

桜島雲の峰まで噴きにけり



大空を覆ひつくせり雲の峰

夕立や子供布団が濡れてをり



母が逝く夢に起されちちる虫

鱚雲母の空言おほらかに



たよりなき秋蝶待ちてシヤッターきる

月下美人の咲く様語る母樂し



想
ふ
こ
と
が
母
の
真
実
秋
日
和

平
ら
か
に
母
と
歩
ま
む
萩
の
風



夫産みし人と思へば秋麗

写真の父笑うてみえし栗ご飯



まちがひの天井届く年用意

残雪や藪の形を留めをり



おほらかや電話で母の初笑

年令を自慢してゐる日向ぼこ



冬の朝線香の煙ゆるぎなし

息とめて願ひ事唱ふ冬の朝



バイク洗ふ水浴びせられ桜東風

154

被災地のシートの花筵

155



ジュリアンの蕾湧くごと春めけり

歌よりも声誉めてをり春炬燵



お風呂場をピツカピカにし春一番

日輪のまさに落ちゆく枯木立



日を置いて書かれし葉書春の雪

若人が年金語る彼岸寒



思ひ出す人みな笑顔春の雲

受け流す母の繰言猫柳



残雪に降りそそぎたる雫跡

残雪を鋤き込む父よ野良始



陸奥は含み笑ひの四月かな

手折れずや蒼もいとし桜草



角
す
ぎ
て
手
を
つ
な
ぎ
け
り
柿
若
葉

桜
東
風
赤
子
の
帽
子
ず
ら
し
を
り



強東風や今朝は鴉も乾び声

啜り泣き広ごりてゆく卒業式



夏座敷夫の軒にリズムあり

あるがまま毛虫も笑ふ樹木園



笑ひ声聞こえる写真水鉄砲

枇杷剥けば種徒に大きかり



数
う
れ
ば
良
き
事
も
あ
り
茄
子
の
花

う
ら
は
ら
の
言
葉
吐
い
た
り
唐
辛
子



いっそのこと起きてしまおか熱帯夜

つつがなく母ふたりあり金木犀



姑とやっと裸のつきあひ十三夜

通院を姑と楽しむ金木屋



姑
を
看
て
母
想
ふ
日
々
秋
の
空

義
母
の
ア
ル
バ
ム
に
我
ペ
ー
ジ
あ
り
冬
隣





3
2008 ~ 2010



通院を散歩とよんで春を待つ

ワンクールひとまず終へて春隣

うちとけて昔語りす寒の入



病室の義母に運びし梅の花

黒猫の一匹は影日向ぼこ



八十路の春“ようし”で始まる母の日記

192

鏡の中で笑ってみる朝さくら草

193





初
桜
願
ひ
続
け
て
退
院
す

初
桜
余
命
宣
告
も
の
と
も
せ
ず

まだ柔し母に紅さす花の朝

花の下遺骨となりし母とゆく



春に逝く実母より母と呼びし人

片陰のすぽーんと消えて再開発



手鞠花たんすに戻す母の衣

200

おむすびの塩まだらなり夏木立

201



水生花園見え隠れする夏帽子

202

新緑の蔦まどひけり松大樹

203



亀遊ぶ六月の森ゆたかなり

ぜんまいの切れるごと蝉静まりぬ



生まれくる蕾
樂しや濃紫
陽花

不機嫌をふきとば
したり梅雨晴間



片陰のすぽーんと消えて再開発

暑氣払ひサツクス奏者の丸き爪



詫
び
る
時
の
が
し
て
し
ま
ひ
軒
風
鈴

空
蝉
や
著
莪
の
葉
し
か
と
つ
か
み
を
り



誉められて嬉しき事あり茄子の花

212

白壁の蝶の蛹に金ボタン

213



嫁終へて母と語らふ夜長かな

214

おもむろに傘さしてあり月下美人

215



月下美人きつと今夜よと電話

216

万両の実の落ちたよに藪柑子

217



ていねいに物言ふ職人冬帽子

218

打ち解けて新妻笑ふお正月

219





螺鈿の如き鱻捌きをり小正月

忙しさを楽しんでゐる松飾

強
が
り
の
本
音
も
こ
ぼ
す
濁
酒

濁
酒
黙
っ
て
本
音
を
聴
い
て
を
り



あどけなき力士の眼風薫る

224

あつぱれな晩年であり花吹雪

225



危
ふ
げ
な
ス
カ
ー
ト
の
丈
春
の
風

226

万
華
鏡
覗
く
が
如
し
額
の
花

227



耀へる雪解水満つ月山湖

228

母の日の夜に嬉しき子の電話

229



改札の幅ほどの力士藍浴衣

熱帯夜赤子泣く声聞いてをり



茶を摘むや姉と弟の笑ふ声

スキップして雀追ふ鴉走り梅雨





短
夜
に
続
け
て
見
た
り
母
の
夢

235

プ
ラ
ン
タ
の
ト
マ
ト
一
号
試
食
会

234

不
忍
の
丘
を
な
し
た
り
蓮
の
華


し
か
と
乳
房
挿
ま
れ
し
夏
マ
ン
モ
グ
ラ
フ
イ



金魚行く波紋の影に速さあり


水撒けば何処より来る曇





秋の池
小聲で
訊ぬ野鳥
の名

のびさうな肌
をしてをり
臺



やはらかき香の残りけり秋の人

ぱらぱらとぱらぱらと降る椎拾ひ

限りなく落羽松
伸びる秋の空

プレゼント着て
みせる子や冬ぬくし





色の名を子に教へをり秋の暮

ジグソーパズル肌冷やかにプラタナス

女の起す事件続いて漫ろ寒

温もりを包んで畳む干布団



嫁に映ゆ我若き日の春着かな

初夢にちちははも居り嬉しげに



薩摩御子女とてなみなみと年の酒

抗ひつつ老を馴らすや春の風




面接官の声穏やかやビル風

254

履歴書を送り返され二月かな

255





年金の切抜を読む炬燵かな

257

熟年は武器とはならず藪柑子

256

ペチュニアを植ゑて同居の子等を待つ

待ち侘びて待ち侘びて梅満開に



明け渡す部屋片付かず春の風

日記

終



につき
日記

著者 齊藤裕子

発行日 2010年11月13日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

製本所 武蔵製本

二〇〇一年創刊の「あを」は来年で十周年を迎へます。「九邀」の詩のやうに「花を藝うゑて以て蝶かたを邀むかふべし。……書を藏して以て友を邀むかふべし。徳を積みて以て天を邀むかふべし。」ではありませんが、正に良友を邀へるべき俳句を作る、これが「あを」の二つの目標です。そのころを形に表したのがこの「限定一部」の句集です。

この句集はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。句集名は喜孝が興の赴くまま付けさせていただきました。

二〇一〇年十一月八日

佐藤喜孝